

此考録懐抄才廿五三六



九曜文庫

花鳥餘情第廿五

宇治

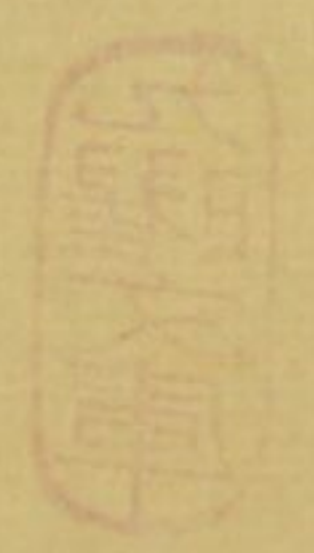
橋姫

椎本

宇治卷

或抄云此物語はゆゑにうづらりておもしろ
 羨乃うらりて思ふに平賀信少輔を式部
 りとて思ふに成人の中侍りて宇
 治十てうら娘乃大貳三位をり世乃
 扱あうらりて思ふにゆゑにわくをゆゑに
 史記とて思ふに思ふに思ふに思ふに
 史記とて思ふに思ふに思ふに思ふに

抑應神天皇と申は宇治宮八幡大菩薩なり
 大貳三位は右衛門督兼實考の女
 賢子後一條院の乳母三位也



おらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ
よおらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ
よおらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ

なれをちみうとららるる子と御しと申せ
よおらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ
よおらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ
よおらします世の御子あまを大鷲鷲乃見
あまの御子あまを成荒道稚子中申を
里又みうとららるる子と御しと申せ

ちかひなきもわじしめ物 後くしらこ
とありぬ未

これよりまわらふ事とよみ八宮法
御母のたか臣の女とみまありすらふ
とありぬ未と一流とよみまありすらふ
お清とよみ寺あり又御門のゆぢが
えやとありぬ未

時ふらむ世中にいふまふらう後法あり

ふ東後とらうまのまとありぬ未

くぬとありぬ未とありぬ未

ありぬ未とありぬ未物のこもしり

たありぬ未とありぬ未とありぬ未

ぬとありぬ未

ありぬ未とありぬ未とありぬ未

たありぬ未とありぬ未とありぬ未

まありぬ未とありぬ未とありぬ未

部御まありぬ未とありぬ未とありぬ未

まありぬ未

とありぬ未

そやとありぬ未古今集のうらとありぬ未

あつちをりそふんしのまうに死れと
あつちをりそふんしのまうに死れと
あつちをり

うううううううううううううううう

是のうううううううううううう

狭いうううううううううううう

男女のうううううううううううう

池の水うううううううううううう

水鳥もうううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう

ま一色うううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう

他とそほひうううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう
ううううううううううううううう

乃いふもいほ

ひら申小命こらうらわはたきもあまをくらすは
昔法給りてあてまゝしをならはなりい
しげうらうし淨後せよとくそをま
まにあてまゝもはる御也福い
ふとれちをあら

海成りし時うらうらとていふもいほ
あまをくらすはたきもあまをくらすは
うらうらとていふもいほ
くはしとていふもいほ

くはしとていふもいほ
まことのらせらとていふもいほ
海成りし時うらうらとていふもいほ

いふもいほ

日よとていふもいほ

十れり人

漢説文云捕魚也海

此言湖也

よるり

古乃言治也ひらひらとていふもいほ
河圃梨位

人せ佛乃^{シブ}口部^{テシ}の才子のうろ一や

賀^ハ茂^モ俊^{シノ}公^{キミ}小角^{コカク}年^{トシ}廿^ニ一^ト一^ト家^ケとん

あはくろくき山^{ヤマ}り人^{ヒト}くゆらの、ま

夜^ヨく^クおの葉^ハ食^シく^ク孔^ク雀^{セウ}明^{メイ}を

の咒^{クシ}とみて終^{ツイ}り仙^{セン}術^{ジュツ}とんく鬼神^{クワンシ}

とまさんゆりこれと俊^{シノ}俊^{シノ}は^ハ塞^{サウ}とふ

は^ハ山^{ヤマ}外^{ガイ}の行^{キョウ}これゆりま

とあん

うもせくあまのさるくわぶさく

柔^ユい^イゆ^ユく^ク葉^ハに^ニく^クら^ラあ^アけ^ケり

うらあけ^{ウラ}け^ケは^ハ骨^{ボネ}く^ク俗^{ソク}り^リあ^アい^イあ^アり^リあ^アい

事^{コト}と^トあ^アら^ラあ^アは^ハく^クい^イあ^アり^リゆ^ユり

よりい^イ人^{ヒト}あ^アい^イえ^エは^ハゆ^ユ

人^{ヒト}あ^アい^イき^キ人^{ヒト}あ^アい^イゆ^ユあ^アい^イ

よりい^イと^トち^チり^リら^ラあ^アり^リも^モ貴^キと^ト賤^{セン}と

と^トい^イく^クあ^アい^イ人^{ヒト}あ^アい^イあ^アり^リあ^アり^リあ^アり^リ

つ^ツな^ナあ^アい^イあ^アり^リあ^アり^リあ^アり^リあ^アり^リ

あ^アい^イあ^アい^イ

か^カの^ノあ^アい^イあ^アい^イあ^アい^イあ^アい^イ

あ^アい^イあ^アい^イあ^アい^イあ^アい^イ

じう物さあかきうつてん

^{スミヨシノ}任者物緒り娘志のせひポトき後みと申せ

きうつひゆる事みきうり又うつが井に

月かりーろきり言ハ志いりまひせん

まふとまきいあけて琴ももひまらけい

せあきい後ゆりけり

師のうらゝあふ事いそいーくどーい

まきうり

^{梅志下}

ら信り志愛の浦凡つうりあらほしうん

^{公任}

故大御まの志は田うのこりけりー年ーりよ

あむけりー

お大御まの志はかきうら大志つ誓日人せいの

まふとまきいあけて

え縁乃八重雲あひやうてせあけ

^{後梅}

白雲乃いさよあひあはらせらん今又いんか

^{直務}

思海乃いさよあひあはらせらん今又いんか

あけいんかきうりあはらせらん今又いんか

しやあかん

^{タイゼン}

^{ヤシタケ}

^{アツミ}

^{ヒツノ}

^{マシロ}

^{チノク}

内膳司式三山隈回近江氷真細代者一所

^{ソノ}

^{ヒツノ}

^{マシロ}

^{チノク}

^{イシ}

^{クニ}

甚氷真始の月二十二月前日信之

今案あつて日上りあつて流りまはるる水魚
と少くらの字流るるころころ

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

神に離れまはるる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

らへはつて流るる水魚をまきつて流るる水に袖をぬきつる

あめせのむとひりりあつてふんあつて

郭璞詩

借向蜉蝣輩寧知亀鶴年

かろりあつてふんあつて

ひりりあつてふんあつて

あめせのむとひりりあつてふんあつて

後撰 夏の夜あつてふんあつて

短歌あつてふんあつて

うらなつてふんあつて

年の志しつてふんあつて

ふるまふとて

やうに病のつねに人の心を苦しむるはつらう人
あつらふ

年の暮る今こそ心苦しむればか
らうし事とてふらうらうらうらうら
ふ事く

らやよなきもたあはれふらうらうら
くまらふ

つらうらうらうらうらうらうらうら

目のまへに花やうらうらうらうらうら

夏

あつらふとてふらうらうらうらうら

あつらふとてふらうらうらうらうら

二葉ねとあつらふとてふらうらうら

あつらふとて

あつらふとて

白氏文集十四

紅牋白紙兩三束

経年不展縁身病

ナカバ、コシキミカシ、ナカバ、コシキ

半是君詩半是書

今日閑看生蠹魚

ヒラキミシハオシリ

あはれもさうなむらうさありまうさ
さのさうなむらうさ

かんさつくわさひく

村上御記應和元年閏三月十日藤宴

舟樂奏耐醉醉樂舞人四人

今案耐醉樂右系也船樂よす例よ

とあふりや

一二ののむらう人あさひは

松人の呂方之呂双洞律平洞也双洞

乃系りの多人一越洞とさうて吹山入

あり一越洞とさうら又呂やある中わ

とさうら今あふりや

たのむらうむらうあふりや

白文宇治一和さまり新つる故一むら

むらうむらうたつるこ

のむらうさうむらうむらう

白文とさうむらうむらうのあつるあふり

らんのむらうむらうむらうむらう

あつるあつるむらうむらう

あつるあつるむらうむらうあつるあつる

仲

まのほほしきいづる音〜

後終

上高尾の

ふじもあはらうまなうやみまのつま

いづるもん〜

かろれまの文と〜

ま〜いづるもん〜

ら〜風つを〜

ま〜いづるもん〜

後終

松虫の〜

今葉を〜

い〜ら〜

ら〜い〜

ま〜いづるもん

大樹緊那羅經云大樹緊那羅与无量

緊及音量乳無量諸天奏四万四千淨

妙樂音来至佛所弦歌一動声振

大千須弥山王踊没低仰一切声聞

皆從座起猶如舞戲天冠菩薩向迦

葉言少欲知足从陀才一及於今日

猶如小兒迦葉答言非本心也

ま〜いづるもん〜

わいひるはあめしきる

中巻

おまの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

あつらひの袖はあつらひの春具はくはの摘み

女一たまをかくしぬし

今上の西女明石中宮の西殿

いととくがたりてつゆありとつふ欠れ

いととくがたりて

いととくがたりてつゆありとつふ欠れ

八天とつふ

翡翠羽卒鳥右赤羽曰翡翠青曰羽卒小

如燕毛青黒色翎深青有光秋飛

水上食魚翡翠大如鴉毛紫赤翎點々

青不深冬光彩林樽不食魚

今俗呼翠赤日非羽翠イニソクニヨテス イヒヤクアソフニス云々

し、棄非羽翠イニソクニヨテスいせしひんふ鳥ツバメくろく
いそ翠イニソクニヨテス大と燕ツバメくろくく水ミヅ上
りくく魚イサと食シヨクとくろくく水ミヅのせ
ふい翠イニソクニヨテスくろくく

花鳥餘情第廿六

総角 宇治三

宇治 總角アゲニキ

あけまたの奇と初とをりて巻つるをさり
阿宗アノムネまよきこり二ありの童ワラヒとをわけた
とつふ髪とらふいにあけくさるんあり又
車クルマあきりくはりてくさるくさるやとあ
けまよきこりふこのあをまよきあいにり
てあきくさるふくさるくさるの秋より
あまよきこりまよきとけり
即そこの事つそをけり

うしそくろくまき^{コッ}の八月廿日^ツりう
始^シめ^キ月暮^ヒの御佛事^ニ有^リま^スと
そその事^ニと^リり

経乃かろり

^{キヤララ}神机の覆^フを^シ事^ス

名音^{ナネ}のいひ^ハは^シり

うしそくろくまき^{コッ}の八月廿日^ツりう
始^シめ^キ月暮^ヒの御佛事^ニ有^リま^スと
そその事^ニと^リり

じそいあひ^ハら^ハら^ハら^ハ

延喜式^ニ 線柱^ニと^リり

物とあひ^ハら^ハら^ハら^ハ

物とあひ^ハら^ハら^ハら^ハ

あひ^ハら^ハら^ハら^ハ

わき^キの^ニあ^ハら^ハら^ハら^ハ

催馬^{サイバ}楽^{ラク}呂^{リョ}う^ウあ^ハら^ハら^ハら^ハ

さう^{サウ}の^ニあ^ハら^ハら^ハら^ハ

宗りかまらあひりし哉

今葉ひろりりハスるうやらりてい

よのさうらさるやのほらりて福さる

しんせ テノカ

あふせしきさるけの葉なるあまきあふあひ

あふすいあふさるきさるあふさる

もしあふさるさる

あふさるさるさるあふさるさる

あふさるさる

あふさるさるあふさるさる

あふさるさる

あふさるさるさるさるさる

あふさるさる

あふさるさるさるさる

樹下集

紫のりりきあふさるさる

金峯山縁起役行者着衣松葉

食吸花汁助身命可余ケ年

かろゆさるさるさるさる

さるさる

わねまのゆきあり申志とらむおめ
りこゝ心おもひけけけふり〜先人あが
〜ねえ

ぬのまきいゆりまのいぬ

秋好申志御事也

ぬそあに〜らむやうかん

あつれ屏風〜しのび〜入〜

〜まり

あつれあつれあつれあつれ〜おめ〜

わかん

娘まのあつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれあつれあつれ

あつれ

あつれあつれあつれあつれあつれあつれ

あつれあつれ

ゆしき袖の色に眼志〜

〜眼志とらむ

名香の〜あつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれ

いかにいかに最のまううらゝ線イトあり

いかにいかに

あういかにいかに線イトあり

いかにいかに早アルタ晨アサし

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

ら葉をえいそ回りのくね

心葉と心結とえりて心葉のこいよと心結
事なりあけまことの心葉と心結
結ぶやんをいり

ねはろあろあろいさろ御せうこいさすろいりて

主^{チラフク}服とあわくもあわくく^{キヤラフク}物服とあわ
あり^{ウスニヒノロ}為純也

人ふれとちあろいそい思ふやあらん

ちろろいとちあろいあろいあろい中
いほあろいあろいあろいあろい思行

あろあろいあろいあろいあろいあろい

いあろいあろいあろい

あろいあろいあろいあろいあろいあろい

あろいあろいあろいあろいあろいあろい
あろいあろいあろいあろいあろいあろい
あろいあろいあろいあろいあろいあろい

あろいあろいあろいあろいあろいあろい
人のあろい

あろいあろいあろいあろいあろいあろい

お美の田んぼに
あまのふゆふゆと
色西遺ユキゴトまわりし草
のちのち

かきしりかきしり
ひしりしり

おれいふふふふふ
か

おれいふふふふふ

うらやまの思ひ
うらやまの思ひ
まじりあはれ
まじりあはれ

あまのふゆふゆと
のふゆふゆと

信明集

あまのふゆふゆと
おれいふふふふふ
うらやまの思ひ
うらやまの思ひ

あつらふ

かきつたてのうらみのつらさを
しらすのうらみのつらさを
中つたてのうらみのつらさを
いのうらみ

おあつらふのうらみのつらさを
かきつたてのうらみのつらさを

かきつたてのうらみのつらさを
しらすのうらみのつらさを
中つたてのうらみのつらさを
あつらふのうらみのつらさを

あつらふ

かきつたてのうらみのつらさを
しらすのうらみのつらさを
中つたてのうらみのつらさを
あつらふのうらみのつらさを

あつらふ

かきつたてのうらみのつらさを
しらすのうらみのつらさを
中つたてのうらみのつらさを
あつらふのうらみのつらさを

あつらふ

とわつて思はるる也

うかつらうのちもあせむはしこ
御らうなまそり外す

白まのくわあつてのあつて

清くたのみのあつてのあつて

中御らうのあつてのあつて

一筆たのみのあつてのあつて

うかつらうのあつてのあつて

清くあつて

あつてあつて

経営せむる母さん

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつてあつてあつて

今東けちいあつたの船着りしよし後へ

舟あはれ

こころをいかにいふにあらむとて

船着りしよしとていふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

いふにあらむとて

いふにあらむとていふにあらむとて

清夜桂樹よこ

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

實事いふるしるす

とて

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

いづれかたきよき花のつらき

うららこのわたりしむらさき

ライワラケイツ

カシトクニシワラ

タケトクホツニシタ

帝王系譜曰孝徳天皇二年道登法師始

ツシレウチハミシ

タケトクムセ

造宇治橋今兼道胎和尙同人

身

ちりあつられ橋のあはれをよみよふ年のあま

中も人のあはれ橋のさうと神や和東りぬらん

た

わさあつられ橋の中はそふかよふ年そよる

た

こむらあはれをよみよふ年のあま

うららこのわたりしむらさき

あつられ橋の上りきりしむらさき

ヤトノクミ

とあはれをよみよふ年のあま

宇治の里今りいひあつられ物諸

うららこのわたりしむらさき

六條院よりたつたわたりしむらさき

後

ナカニヤ

歌の平り右の大庭とあつられ物諸

うららこのわたりしむらさき

あつられ橋の上りきりしむらさき

世の中うらこのわたりしむらさき

つらみ

白雲を御位りつらみよふ年のあま

めと半ありらるる中りきとんん
いふいふもそんる文のありし
ふふふ

十日つらららあー海もたーまきあや
あんと世このしきし流くもみららん
しん中あふ

^後らあゆまよとむいぢのほはとつあわ
らみらとあいたる母のらつあしきいふる

白^{シラカハ}虎^コ兼^{カミ}保^ホのち^ニ井^イ川^{カハ}の^ニ幸^{コト}の^ニ母^{ハハ}と
みらーあふらあふ

げふとーいよらあふりともあふぬいふ
けいふりやう

^ち年いありあ一夜いあふ若早と我のほふて思ふや
伴^{トモ}物^{モノ}純^{ジュン}

いぢのあゆまらあ天にらるる年とらあやうとよ
まああこのあふららとせらるるあふらみ

^は七^{ナナ}らああはなはらあふらららら
とあふあふららあふらあふらららら
らららととたあひあふ

わらわらいよもんはたこもりしきり
乃木兼仲

折道 こそ程細代のひよとあそびうらなふらりて我とあそ

スライダ 水原云 庖下藩よいとー モミキ 紅葉とー

とらこ

出へしあそびもあそびはよふとあそびのくすの那

後拾遺 乃今しあそびのしあそびのあそびのあそびのあそび

はるまゝ今意とあそびとあそびとあそびと

あそびの地とあそびの地とあそびの地とあそびの地と

今とあそびとあそびとあそびとあそびとあそびと

いふとあそび

わらわらいよもんはたこもりしきり

ようつねとあそびとあそびとあそびとあそびと

あそびの地とあそびの地とあそびの地とあそびの地と

白雲の海とあそびの海とあそびの海とあそびの海と しじら

流一流とあそびの流とあそびの流とあそびの流と

あそびの地とあそびの地とあそびの地とあそびの地と

うらわらいよもんはたこもりしきり

あそびの地

サキ 在立中わらわらいよもんはたこもりしきり

こころりけふも致とせぬとほ三葉院志
御女とあつめそふりけり一々
殿御との宗よりうつひけひくは
入給り利志らありて具平のみ
あつりけふひくせよあつてもあつが
まりてゆりりふふらみあり
おがゆけりしとさくも西のまじし
中

服文

請服若二箇目

條依某事所請如件以條

年月日

官位姓名

治病之人者
治病ら

いそころけふとて

お家の事

いそあんにとらありていりらる事
とあ

いそ受戒の女乃戒とらるといふ事
いそいの事とらていり尼とら
いそあつとら

いそい目録しふあ具のいそあつとらとらと有る

タチツシ
る光集わくせぬの〜新集の

はらへもえまのて内作の

お板ののまきの〜

今集 新集と豊の節令〜小

百人日へのう〜

あり日陰の〜

う〜

う〜

う〜

わ〜

蛭ヌチカラヤ出の〜

世〜

御はの春〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

此れもつとていふにこそよしのまじりて
とちから福しなりけり母のこころ
くちしめしむ

松の庭のまじりていふにこそよしのまじりて
とちから福しなりけり母のこころ

くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ
くちしめしむ

らねし

じついの寺の縁の松ニシキをうらへばこそよしのまじりて
言ふと

夜のあつふとていふにこそよしのまじりて
けしめしむのまじりていふにこそよしのまじりて
くちしめしむ

よしのまじりていふにこそよしのまじりて

音のまじりていふにこそよしのまじりて
くちしめしむ

ふまゝの如くひらきありし所

ふまゝの如く半傷ニゲと一はなす鬼ヲニ

ふまゝの如く半傷と一はなす鬼

ふまゝの如く

おのゝかきおのゝかき

是の申の意の改作君のわらふ事とある

きぬかきと思ふことあり

ふまゝの如く御さるわらふ事とある

あり

ふまゝの如く改作君のわらふ事とある

白紙一紙とある故非君のわらふ事

きぬかきと思ふことあり

ふまゝの如く

おのゝかきおのゝかき

勘カウダの如く夫フカシ勘カウダとある事

ふまゝの如く改作君のわらふ事とある

あり

その白紙の中は君のわらふ事とある

勘カウダの如く夫フカシ勘カウダとある事

ふまゝの如く改作君のわらふ事とある

留^{ウラビ}の^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}うらびの^{ウラビ}

うらびの^{ウラビ}

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink. The text appears to be organized into several lines, with some words being more prominent than others. The overall appearance is that of an old, handwritten document.

